

# 書簡の中の“戦争”と“和平”

——新居格・郁達夫<sup>いくたつぷ</sup>往復書簡をめぐって

顧 偉 良

## はじめに

昭和十五年、読売新聞社が日本と中国の作家同士の往復書簡を掲載する計画を立てた。すなわち、武者小路実篤と周作人、新居格と郁達夫、小田嶽夫と魯迅未亡人許広平という具体案だった。だが、実際、計画通りの掲載は、武者小路実篤・周作人往復書簡だけだった。武者小路実篤・周作人往復書簡は、昭和十五年六月二十、二十一日の読売新聞の学芸欄に掲載され、小田嶽夫と許広平のは実現しなかった。新居格・郁達夫往復書簡は、郁達夫の避難先、シンガポールの『星州日報』副刊『晨星』（華字新聞、郁達夫が編集）に中国語文で掲載された。この往復書簡は、ずっと日本で公開されることなく、日本の読者の目にも触れられないまま今日に至っている。

本稿では、この往復書簡をとりあげ、当時の近衛内閣から出された「東亜新秩序」の声明の裏にある“和平工作”、および汪兆銘の“和平案”に呼応した三木清の公開書簡について検証する。そして、新居格・郁達夫往復書簡をめぐる日本以外の論評を紹介し、シンガポール時代の郁達夫、及び郁達夫・新居格の出会いについて考察する。まず、その往復書簡の全文を引用しておく。

## 一 新居格・郁達夫往復書簡

### 敵と我々の間

若いときの教育を敵国で受けたため、旅住十余年、その間当然少ない日本の友人を持った。帰国以後福州、上海、杭州等で閑居している間に、敵国の文武官吏ないし文人学者で中国に來遊したものは、大抵私に会いたがった。他の者はしばらく措き、今度の両国交戦中の多くの将領、たとえば松井石根、長谷川、阿部等は、中国へ來たさい、皆私に会い、私も日本へ行つたさいにはよく彼等と会った。

七七（引用者注）即ち、一九三七年七月七日に勃発した盧溝橋事件）抗戦の事が起り、当然私交のことは語られなくなった。だが、個人の消息は彼等の新聞雜誌上にのり、時に或いは論評されたりした。甚だしいのは、戦後の私の家庭紛糾が敵国の文藝界の話題になり、『大風』に発表したあの『毀家詩紀』も本年一月号の『日本評論』皇紀二千六百年記念大特集号誌上に記載された。春秋の義に按じ、これ等に対しては私は勿論不問に附するだけである。

今回、東京読売新聞科学藝部からの書状に接したが、中に文藝批評家新居格氏の私に対する公開状の原稿が同封されていて、編集者は必ず新居格氏に対する返書を書いてくれるようねんごろに私に要請してい

る。これに対し私は可なり長く考えたが、若しこれをほうっておけば、いかにも私が小国民らしく根性が小さく、君子の寛弘さの無いことを笑われるかも知れない。また若しこれに應ずれば、敵国の新聞雑誌に万々歪曲して翻訳され、宣伝の材料にされるとしたら？ 即ち第一の場合は春秋の義に違背するし、第二の場合は今次殉国の我が老母と兄の在天の霊に申訳が立たない。そこでさいごには次のように決定した。私は先ず来信をここに訳載し、そのあとで中国文で返書をしたため、それを自分の編集するこの『晨星』で披露し、その切抜きを送ることにする。そうすることで公誼私交に対し或いはその両全を求められるのではないか希うのである。今先ず新居格の公開状を左に訳記する。

(以上の文は、小田嶽夫訳による)

### 郁達夫君宛

いま、ちょうど岡崎俊夫君の訳したあなたのすばらしい短編小説『過去』を読み終えたところです。これをきっかけに、私の脳裏にあなたの過去の思い出がまた浮かんできました。最初にお目にかかって以来、もう十何年経ったでしょう。あの時、あなたに案内されて、私たちは上海の南市（訳注：上海の市街区）の中国風の公園を見て回り、閑静な静安寺あたりの外国人墓地を散歩しました。そして、霞飛路の曲がり角にある一軒の珈琲店で長時間のくつろぎをとっていました。あそこで、あなたは私に、ここは中国の近代知識界の男女がよく来るところです、自分は問もなく安徽の大学<sup>\*</sup>に行くと、話してくれました。

「何を教えますか」と私は聞いたが、『源氏物語』です。たぶん「桐壺」から始まると思います」とあなたはおっしゃられました。これまでに『源氏物語』すら読んだことのない私にとっては、あなたの言葉で確かに私を驚かせたのです。そして、話題が『源氏物語』に匹敵する

『紅樓夢』に移り、私は『紅樓夢』の英訳本に触れたが、その時、あなたはあの英訳本の訳名“Dreams of Red Chamber”は正確ではない、とおっしゃられました。その時に説明なされた理由を、私は今でも覚えています。

数年前、私は二回目に上海に行った時、あなたがすでに杭州に移られたと聞いています。令兄の郁華氏にお会いしましたが、令兄は、「弟は二三日前に杭州から上海に来ていたが、昨日帰ったところです。もしあなたが上海に来ていることを知ったら、会えなくて残念がつているでしょう」とおっしゃられました。

しかし、その後、東京でお目にかかる機会に恵まれたのです。日本ペンクラブが常務理事会を開いた時、来賓としてあなたと郭沫若君を招待する席上、私たちは久しぶりの対面でお別れの旧情を話し合いました。

中日戦争（敵が「日支戦争」と呼ぶ達夫注）が起こりました。

いま、どこにいらっしゃるんですか？ なにをなさっていますか？ これらはいつも私が思い出してやることです。人と人の感情は、両国間に起きた不幸な出来事によって変わることがないでしょう。このことに関して言えば、あなたにだけでなく、私の知っているすべての中国の友人に対しても同様です。

今、私はこう祈禱しています。つまり、両国間の不幸は一日でも早く去って欲しいこと、以前と同じように、いいえ、あるいは以前よりももっと親しくなるよう、互いに芸術について語り合う日が到来することを。実際、文学に従事する者同士なら、大抵互いに信頼し理解し合い、心底を披露し、率直に語ることができるのです。なぜなら、「人間性」は共通の問題だからなのです。とにかく友好であること。日本の友人や中国の友人などといった形容詞は考えるに値しません。どのような場合とも両国間の根本的な平和の転機は、冷却した関

係にある人間と人間の信頼関係を取り戻すきっかけとなります。戦争は無用で、政策なんて要りません。ましてや我々創造者の世界において、政策が殊更必要なものではないので、そうすると、もっと融合しやすくなるのです。

正直に言つて、私は二十世紀現状に対する少なからぬ懷疑を抱いています。この世紀は政治家の言論の時代だと思えます。しかし、これには必然的な理由、或いはそうならざるを得ない理由があるのかも知れません。なぜなら、人類の生活にはまだまだ多くの欠陥があるからなんです。だが、我々創造者は立ち上つてこういった欠陥を補正しなければならぬことを放棄してはならず、それだけでなく、さらに創造という真正の責務を持たなければならぬのです。

これが正しい道ではないでしょうか？ 郁君！

乱筆にて失礼いたします。ご健康をお祈りします。

新居格

(以上の文は、引用者訳)

### 新居格氏宛

敬愛する新居君、東京の読売新聞科学藝部からあなたが私に宛てた公開状を送ってきました。両国交戦中の今日、あなたが私をお忘れなく、私の近状を御心に掛けていられる御友誼には、大いに感謝しています。誠に御手紙で述べていられる通り、国家と国家間には干戈殺伐の不幸があるにしても、個人の友誼には変わりありません。個人間の友誼だけでなく、私は信じてますが、民衆と民衆間の親愛感も同様に存在しています。

ここに一例を挙げますと、日本のたくさんの、戦争に参加して中国へ来た友人たちは、すでに重慶や桂林や昆明などで我々の優待を受けています。彼等は自動的に広大な同盟を組織し、演劇によって資金を

集め、我々の難民や傷兵を救助し、又我々と一緒に工作していますので、真正の平和は早く到来するかと思われれます。彼等が日本語でやつた「三兄弟」という芝居には、我々の同胞は落涙させられました。

新居君！ 人情は天下どこでも同じことです。正義感、人道、良心は誰でも持っています。王陽明先生の良知の説は、今日でも、この殺伐、残酷の末世でも打ち破ることの出来ない真理なのです。

日本国内の様子乃至あなたの方の吸つていられる空気は、私にはよくわかります。だから政治に関する話、時局に関する話は、ここでは言う必要がありません。よしんば言つたところで、あなたは決して見ることが出来ません。ただ一つだけお告げすることがあります、中国の民衆は今次の戦争の結果非常に進歩しました。彼等は団結することを知りました。彼等はどんなに苦しくとも最後まで忍耐することを知りました。彼等はみな「どんな犠牲を払うことも惜しみはしない」決心を持っています。彼等はみな国家の危難を自分の責任とと思っています。戦争は中国の土地で進行しているので、航空機の爆弾で死傷するのはみな彼等の父老姉妹です。日本の爆弾で彼等の国家・民族観念を呼び醒ました。

私個人のことを述べることにしますが、今次の戦争は私の杭州、富陽にある田園、財産を破壊しました。私の七十歳の老母を奪いました（後記参照）、更には嘗つてあなたが上海で会われたことのある私の兄、蔵書三万冊、および愛妻王氏（引用者注＝王映霞）、みな今度の戦争で私から離れました。だがこれらの事に対しては、正義はいつの日か私の一切の損失を補ってくれる」という信念を持っています。

私は高等学校の学生だった時代に、ドイツの作家 Kleist の小説「ミヒャエル・コールハース」を読んだことがあります。私の現在の決心は、この最後の息を引きとるまで正義を要求した主人公と同じであることです。御手紙に言われている「二十世紀現状に対する懷疑」、

「人類の生活にはまだまだ多くの欠陥がある」、「我々創造者は立ち上ってこういう欠陥を補正しなければならない」については、私は十二分に同感です。現在中国の多くの創造者たちはすでにそれぞれこの工作を進めています。中国の文藝はこの僅か三年のうちに、三百年の進歩を克ち取りました、中国の知識階級は現在大方個々にすでに実際の創造者になりました。仮にあなたが現在のこの時期に中国の内地（戦地の後方）に來られ、仔細に觀察されたとしたなら、私のこの言葉が決して空言でないことを率直に認められるでしょう。

中国が持っているのは地大物博であり、人口多数です、欠けているのは人心の不良です。だが今次の戦争の洗礼を経て、持っているものは更にその光輝を發揮し、欠けているものは八、九割がた改新しました。民族の中のたまり滓かすはもう浪に洗い浄められ、現在後方では重荷を負って遠方へ向っていて、皆々非常に善良な国民です。

中国の民衆はもとと平和を愛好するものですが、併し彼等も真正の平和と虚偽の平和が同じでないことは弁別できます。平和はきつといつか東半球に現出しますが、ただ、彼等は今はまだその時でないことを感じています。

新居君！あなたは以上私の言ったことを、すべて威嚇性を帯びた大言壮語と取られますか。否、決して否！これらはみな現在の自由中国の現状であり、実情です。この一篇の文字があなたの眼前に達することが出来るかどうかにかかわらず、私は現在の我々の心情、環境を、あなたに對し虚飾なしに報道したいのです。半分はあなたに私およびその他のあなたの友人の近状を知ってもらうため、半分は日本の民衆の参考に供したいためです。事を知るには實際を見なければなりません、断じて太鼓のうちにいて、一面の辞を盲聴し、「民ハ之ニ由ラシムベシ、之ヲ知ラシムベカラズ」の古いわなにかかつてはなりません。

最後に。私には日本の友人がほんとうに多く、四年前に日本へ行っ

たとき諸君から受けた歓待は、今でもはっきり私の心目のなかを旋廻しています。殊にも京都へ行つたとき、汽車から降りるとすぐ奈良へ行つて志賀直哉氏を訪ね、京都の警察庁に、彼等が責任をもって保護する旅客を見失うという恐慌を起させたことは、今でも申訳ないことに思っています。

御返事のないで私はここに一言、多くの友人たちの健康を祝いたいと思います。あなたに對しては、新居君、私は私たちが握手する日が必ずやって來ると思っています。その時は、一切の平和を阻礙し、干戈をそそのかす悪魔は、すべてもう天堂へ上るか地獄へ落ちるかしていると思いますし、我々は赤誠の心と貞摯の情で藝術を語り、さては世界人類一切の欠陥を是正する方法を考えたいと思います。

郁達夫

（以上の文は、小田嶽夫訳による）

（附言…この文章を書き終えたころ、故国から林語堂氏の手紙が届きました。彼はすでに重慶に來ており、近いうちに戦地を視察し、資料を集め、彼の第二部の大著を完成するところです。彼の『北京の瞬間』(Moment in Peking) は、すでにお読みになつたと思います。が、私は今それを中国語訳しているところです。翻訳の原本は、彼がつけた細かな注釈を解説した本です。この訳本は世に出たら、日本で出版された同書の二種類の訳本に對して、多くの訂正を加えることになると思います。）

シンガポール『星洲日報・晨星』(一九四〇年六月、二日)

以上、新居格・郁達夫往復書簡を全文引用した。引用文は、郁達夫の「敵我之間」(『郁達夫海外文集』、三聯書店、一九九〇・十二)によるもの。一部の訳文は、小田嶽夫の著書『郁達夫傳―その詩と愛と日本』(中央公論社、昭和五十年三月)の中から引用した。なお小田嶽夫

は、その著書で論評抜きで郁達夫の新居格宛書簡のみを訳した。

\* \* \*

郁達夫の息子、郁雲の『私の父親郁達夫』（台北蘭亭書店、一九八六・三）によれば、一九四〇年五月、文芸評論家新居格は、東京読売新聞芸芸部の編集者に託して、郁達夫宛書簡を送るよう頼んだという。それを受け取った郁は、直接、新居格氏に返信を書かなかった。郁は自分の返信と、訳した新居格の書簡を『星洲日報・晨星』に掲載したあと、その切り取りを東京読売新聞芸芸部の編集者に送ったのである。ここで、郁達夫・新居格往復書簡をめぐる日本以外のところの反応を紹介しておく。台湾出身のハーバード大学教授李欧梵は、『郁達夫抗戦文録』序<sup>2</sup>の中で次のように述べている。

「敵と我々の間」という文の中で、郁達夫は、まず日本の友人新居格の書簡を訳し、そして自分の返信を書いた。この二通の書簡を比べてみると、前者の「量見の狭さ」と郁達夫の「度胸」を感じられる。新居格の書簡は、ところどころに郁達夫に秋波を送る箇所が見られるが、明らかにそれは「和平工作」を行っていることである。郁達夫の返信は、中傷悪罵（魯迅晩年の癖）でなく、個人の経歴から「正義感、人道、良心」といった話題にまで言及している。彼は新居格の言う「友情」は和平工作の手段にすぎないと知っているながらも、旧き友情を念頭に入れて、その「友情」を更に高い境地で考えていた。もっとも私を感動させたのは、書簡末尾の文である。

シンガポールの方修は、『郁達夫抗戦論文集』序<sup>3</sup>の中で次のように述べている。

郁達夫は、日本の作家新居格氏への公開書簡の中で彼の抗戦決心

を示した。（略）当時の日本側から出された和平工作に対して、郁達夫は「中国の民衆は、もともと平和を愛好するものですが、しかし彼らも真正の平和と虚偽の平和が同じでないことは弁別できます。平和はきつといつか東半球に現れますが、ただ、彼らは今はまだその時でないことを感じています」と答えている。

郁達夫の一生の歩み、特に晩年の彼の思想の進展からみれば、いくつもの文学史では郁達夫が愛国主義者だと書かれているが、これは決して美辞麗句ではないと思う。（略）愛国主義は、もともと中国の詩人や文士のすぐれた伝統であり、特に国家民族が危急存亡に差しかった時には最も際立つものである。

そして、上海華東師範大学の陳子善・王自立は、「郁達夫晩年の愛国主義精神」の文で、次のように述べている。

一九四〇年六月一、三日の『星洲日報・晨星』に発表された「敵と我々の間」の一文は、「序言」「新居格の書簡」「郁達夫の書簡」と「附言」の四つの部分に分かれている。この文章は、郁達夫の愛国主義精神を示す傑作である。

新居格は日本の文芸批評家で、彼の郁達夫宛の書簡では不自然に郁達夫とのつきあいや友情に触れている。新居格は日中戦争の話題に触れたものの、（略）残酷な侵略戦争という現実を度外視し、「友好」「ばかりを強調している。これが新居格の書簡の本意である。

以上、三つの文章を紹介したが、三つの文章では、ともに新居格の書簡は「和平工作」のきらいがあり、戦争という現実を回避しているという見方が示されている。新居格自身の個人的意図はともかくとして、新居格に触れた「和平」の問題に対して、郁達夫は回避せず、日

本軍の侵略行為をあげて中国の現状を説明している。これについては、確かに当時の日中関係を反映した最も敏感な問題だったのである。おそらく読売新聞社側としては、日中両国の文人同士の往復書簡を通じて、国策としての「和平工作」に何か貢献しようという意図があったのも決して不可思議ではなからう。ここで、「和平工作」をめぐるもう少し考えてみよう。

一九三七年七月の盧溝橋事件で、日本は中国への全面的侵略戦争に突入した。日本軍の圧倒的な軍事力で首都南京を占領した後、三月十八日、近衛内閣からの悪名高い「爾後国民政府を対手にせず」という声明が出され、戦争は益々拡大される一方だった。ところが、三八年十一月、日本軍による武漢、広州攻略後、日本軍の作戦は、中国軍の抵抗で膠着状態に陥ったのである。

一九三八年十一月三日に、近衛内閣は「東亜新秩序声明」を発表し、傀儡汪兆銘（当時は国民党副総裁、一九〇四年法政大学に留学）を引き出し、何とか戦争の局面を取捨しようとした。近衛内閣は、日本と徹底抗戦を決心した蒋介石を悪魔と蛇蝎視し、他方では近衛声明に呼応する汪兆銘に秋波を送り和平工作を進める。この工作をめぐる蒋介石と対立した汪兆銘は、三八年十二月十八日、突然、重慶からハノイへ逃亡。同年十二月二十九日、汪は「善隣友好、共同防共、経済提携」と唱えた近衛内閣の声明にに応じて、「戦時を終結させ、東亜和平の局を確立するに、まことに再び失うべからざる良機」と、ハノイから重慶政府に通電し、「和平案」を献策した。蒋介石の答えは、汪兆銘をはじめとする国民党内の「和平派」の党籍剥奪、永久除名という処置だった。その後、ハノイから上海に戻った汪兆銘は、極秘に訪日し、平沼内閣の閣僚との密談を行ったわけである。帰国後、汪は国民党内の「和平派」のメンバーと糾合し、「南京政府」の樹立へ突き進むのである。これ以降の日本のマス・メディアでは、東亜新秩序の建設

に関する報道が、色に染められた。汪兆銘から出された「和平案」に対し、三木清は、公開書簡「汪兆銘氏に寄す」（『中央公論』昭和十四年十月号）をしたため呼応した。

貴下は和平救國を掲げて蹶起されました。貴下のこの決意に對して我々は大いなる尊敬の念を懷かざるを得ませぬ。蓋し我々は貴下の和平救國運動が孟子のいはゆる惻隱の心に發するものと信ずるからであります。嘗て貴下が初めて中國革命に身を投ぜられたる時、貴下はかの民報紙上において『革命の決心』を論じ、孟子の句を引いて、惻隱の心をもつて革命的行動の原動力となすべきことを訓へられたのでありますが、貴下今回の行動もまたその心に出づるものであり、これ則ち我々がヒューマニズムをもつて新東亞建設の基礎と考へるのと軌を一にするものであります。東亞古來の道德のうちには実にヒューマニズムの精神が脈々として貫いてをり、その根底に還つて日本と中國との善隣の關係が結ばれねばなりません。

今日の和平はもとより從來の戦争における媾和の如きものと根本的に意味を異にしなければならぬのであります。從來の媾和においては、戦勝者にとつては如何にして相手に自己の意志を押し付けるかが問題であり、戦敗者にとつては如何にして相手の要求を割引させるかが問題であつたのであります。日本は今日にただ利己的な目的を能ふ限り中國に強要しようとするものではありません。和平は中國にとつてまた如何にして能ふ限り利己的に取引するかといふことであつてはなりません。歴史を支配する理性は紆餘曲折を経るにしても結局自己の普遍的な目的を實現するのであり、個人も民族もすべて世界史の審判の前に立つてゐるのであります。歴史の理性的な目的を洞察して歴史の進歩に貢獻することが我々の義務であります。これ日本のインテリゲンチヤが今次の事變以來熱心にこの

事變の「世界史的意義」を追求してきた所以であります。その結果が「東亞協同體」の思想となつて現はれたのであります。和平の目的は日本にとつてはもとより中國にとつても決して消極的なものでなく、「東亞新秩序の建設」といふ積極的な目的に向つて兩國が相携へて邁進することにあるのであります。和平は單なる妥協とは根本的には區別されねばなりません。東亞新秩序の建設は日本と中國とが協同して負擔すべき共通の世界史的課題を意味するものであります。

貴下の和平運動に動機を與へたいはゆる近衛聲明は、日本は中國に對して割地賠償の如き要求は行はず、ひたすら兩國の善隣關係と共同防共並びに經濟合作の三項を要求するのみであることを明かにしたのであります。近衛前首相は最近東京日日新聞紙上において、この聲明の當初これに對する全國の反響が或ひは重大な事態を招來するのではなからうかと慮れてゐたところ、意外にも全國これに異議を挟む者一人とでもなかつたことは眞に慶幸の至りであると述べられてをります。日本の國民は今次の事變が從來の戦争とは全く性質を異にするのであることを能く理解してゐるのであります。また本年初夏貴下との會談において平沼前首相は貴下に對し次のやうに述べられたといはれております。即ちベルサイユ條約はすべてこれ私的偏見をもつて満たされたものであつて、その責めは實に戦勝者によつて負はるべきであり、欧州大戦戦勝國によつて組織された國際聯盟が崩壊したのもそこに、因がある故に、今次の事變に對する日本の處置は中國と苦樂を共にするの計をもつて行ふことに決定しており、戦勝者といふ一方面的な偏見を棄てて東亞永久の和平を保つにあると述べられたのであります。實に戦勝者といふ一方面的な偏見を棄て、平等互惠の原則に立つて計ることが東亞永遠の和平を實現する所以であります。日本と中國とは協同者であるのであります。

日本は獨善的であつてはならず、中國は猜疑的であつてはなりません。 (以下省略)

上記の文に見られるように、三木清の唱える「和平の目的」は、すなわち「東亞新秩序」の近衛聲明に呼応したものであり、いわゆる「東亞協同體」論も、実は「東亞の盟主」日本の主導性を前提としたものにすぎない。實際、一九四〇年三月、南京に成立した國民維新政府は、日本軍部の庇護下に置かれた傀儡政權にすぎなかつた。傀儡汪兆銘側には全く主導權がなかつた。そして、三木清は、彼の唱える「歴史の理性的な目的」に「事變」の「世界史的意義」を追求しようとしたが、その言説は、実はヘーゲルの「歴史の理性」の延長上に位置づけられるものであり、日本帝國主義の侵略戦争という現實を度外視した極めて観念的なものであると言わざるを得ない。

ここで、作家武田泰淳の「支那文化に関する手紙」の中で彼の語っている中国戦地体験を見てみよう。

兵士たちは外務省や文部省の留學生のやうに題目を与えられ、研究費をもらつて行つたものではありません。天皇陛下の御命により、ただ身一つで行つたのであります。(略) 兵士たちは東亞協同體論も知りません。その他大雜誌の巻頭に飾られる、東亞に関する大論文も読んでいません。(略) はじめて戦場をふんだ一兵卒の私には揚子江文化を研究するなどという心のゆとりはありませんでした。荒々しい感情の渦に巻きこまれていたのです。(略) 日本軍の寛大な処置も効なく、焼き払われて打ち壊された残骸のみがありました。私のはじめて見た見た支那の家屋は砲彈の痕すさまじき壁であり、私のはじめて見た見た支那人は腐敗し物言わぬ屍でありました。学校には倒れた机の上に泥にまみれた教科書があり、図書館には弓の揃つた

『新青年』や『歴史語言研究所集刊』などが雨水に打たれていました。それは淋しくもはかなき文化の破滅のように見えました。(略) 上海戦から南京戦、徐州戦、漢口戦と作戦が進行し戦線が拡大され、土地土地の支那人に接する回数が多くなるにつれ、私の支那文化に対する考えも変わって来ました。

昭和十二年十月、武田泰淳は輜重補充兵として従軍した。彼が、町中に転がっている、日本軍に殺された中国人民衆の死骸を目撃した場所は、すなわち彼が最初に上陸した上海の玄関口、呉淞<sup>ウソン</sup>という町だった。作家としての武田泰淳は、帰還後、自分自身が侵略者の一味であるという内面の恥辱感をもって、「中国」を他者として追究しそれを描き続けていた。

郁達夫の書簡でも述べられるように、「戦争は中国の土地で進行しているのです、航空機の爆弾で死傷するのはみな彼等の父老姉妹です。日本の爆弾は彼等の国家・民族観念を呼び醒ました。」と。当時の日本政府は、もしも真に平和を望んだならば、まず中国占領地に送られた兵力をすべて撤退させなければならなかったはずだったが、実際はそうしなかった。この意味で、「東亜新秩序」や「東亜協同體」の建設は、その欺瞞性が実に明白であった。

## 二 シンガポール時代の郁達夫

日本帝国主義の侵略戦争は、中国という多民族国家に存亡の危機をもたらした。一九三七年十一月以降、中国の沿海部や内陸部の主要都市が次々と日本軍に占領され、十二月、首都南京が陥落した。当時の国民党政府は、臨時首都を四川省の奥地にある重慶と定め、政府機関は前後して武漢や重慶に移転した。一方、日本軍は広大な占領地を維持するためには、膨大な兵力を張りつけなければならなかったのでは

る。一九三七年末には、中国本土に送られた日本の兵士は、およそ七〇万前後だったという。因みに、日本が投降した一九四五年には、中国戦線における日本の戦力は、一二〇万にまで膨れ上がっていた。

日本の侵略戦争によってもたらされた中国という国家の危急存亡の中で、戦争への抵抗と自国文化の再建のため、中国の知識人たちの果たした役割は大きかった。当時、福建省政府の参議を務めていた郁達夫も、抗日活動に参加した。三十七年十月、福州文化界救亡協会が成立、郁達夫は常務理事に選ばれる。協会機関誌『救亡文芸』を創刊。そして、日本から帰国したばかりの郭沫若の要請で、三十八年三月、郁達夫は軍事委員会政治部第三厅の設計委員として武漢に赴く。第三厅の仕事は、主に国内外に向けて広報活動や抗日宣伝を行うことだった。郭沫若は第三厅厅长を務めた。三十八年十月、武漢や広州が相次いで陥落し、中央政府は武漢を放棄することを決意した。こうした状況の中で、大量の人々は奥地の桂林や重慶に移動し、一部は香港や南洋へ脱出した。重慶に行きたがらない郁達夫は、湖南を経由して福州に行った。同年十二月、郁達夫は夫人王映霞と子供の三人でシンガポールに渡った。次の文は、当時の様子を伝えている。

私は抗戦が始まるとすぐ武漢に行った。その後ずっと各戦場を見て回った。中央政府が武漢を放棄すると決意したあと、政治部の同僚たちと別れたのである。彼らは桂林経由で重慶へ行ったが、私は長沙、江西経由で福建に行った。二ヶ月ほど福建の北と南を見て回り、ここ（訳注：シンガポール）へやって来た。今は『星洲日報』副刊の編集担当だが、そのほかに私は、三月に半月刊の文芸誌を出したいと考えている。

郁達夫がシンガポールに渡ったのは、『星洲日報』の社長胡昌耀の



要請だったのである。胡氏一族は、地元のシンガポールだけでなく、香港、タイ、ビルマ（現在のミャンマー）で「星」系の華字新聞をも発行していた。国内にいた郁達夫は、香港の『星島日報』に文章を送り発表することもあるので、シンガポールではかなり知名度の高い人物なのだった。因みに郁達夫は、シンガポールに着いた翌年一月、七〇歳の老母が日本軍に包囲された故郷の家から離れようとしなかったため、三十七年十二月三十一日、とうとう食糧が途絶え餓死したという計報に接した。

シンガポール時代の郁達夫について、小田嶽夫は、彼の著書『郁達夫傳——その詩と愛と日本』の中で次のように記している。

達夫等三人は十二月二十八日（昭和十三年）にシンガポールに着いた。達夫はこの漢字新聞『星洲日報』の副刊『晨星』の編集に当ることになった。（略）

彼は『晨星』の編集だけではなく、右の『晨星』と本紙『星洲日報』にまたがり、翻訳、紹介、創作、小品、隨筆、評論、詩詞あらゆるものを書き、更に政治、経済に及び、又教育に関することにも筆を伸ばした。彼の仕事は大別して文化啓蒙と抗日宣伝の二つと言えるが、殊に「抗日」の上での彼の責務は大きく、のちに戦争が大東亜戦争に発展したさいには、彼は文化界戦時工作団主席、戦時工作幹部訓練班主任、新加坡華僑抗敵動員委員会執行委員、文化界抗日連合会主席など多くの重要地位に立たされ、いつのまにか一個の戦士に変身している有様であった。

『星洲日報』の副刊『晨星』の編集を務める郁達夫は、シンガポール駐在のイギリス情報部の主宰する『華僑週報』の編集にも当たった。彼は、陥落直前のシンガポールを脱出するまでの三年間に夥しい政論

や文論を発表した。当時の複雑な国際情勢を見守る中、国際政治、経済の動向、特に欧州情勢、極東の戦局を分析し、抜群のジャーナリストイックな本領を発揮した。『郁達夫海外文集』（三聯書店、一九九〇・十二）には、全部で二百二十二篇の文章が収められており、これらの文章は、シンガポール時代の郁達夫の全記録と言っている。その意味で、『郁達夫海外文集』は、一種のメタ・テキストとして、すなわち郁達夫の晩年を解き明かす「作品集」として、彼の晩年に歩んだ道、および彼の思考の道筋について我々が辿っていくことを可能にしてくれるのである。

シンガポール時代の郁達夫に会った日本の作家は、おそらく一人もいなかったのだろう。小田嶽夫は、その『郁達夫傳——その詩と愛と日本』の中で、陸軍報道班員としての彼がシンガポールへ向かう海上の様子を、次のように伝えている。

（前略）シンガポールは昭和十七年二月十五日に日本軍に占領されたが、これより早く達夫は友人たちと民船に乗じて、オランダ領スマトラ島へ逃れた。

それより約二カ月前、私は香港沖を西方へ向う海上にいた。私は陸軍報道班員に徴用され、南方戦場へ向かっていたのであった。同じ船に同じく徴用された井伏鱒二も乗っていて、ただ私たちはこの地へやられるのか、切不明であった。或るとき私は井伏鱒二に言った。「郁達夫がシンガポールの新聞社にいるんですかね。若し彼等がシンガポールへでも行くことになるなら、彼に会えますよ」

その実こんな考えはじつに甘いものであったのだ。達夫がシンガポールで抗日の筆陣を張る、それは中国人として当然の責務であった。その当然のことを為している彼に対して、日本軍が報復行為を

行おうとは私は少しも考えていなかったのであった。だが達夫等は、危険の身に及ぶことをはつきり知っていたのであった。

一九四二年二月十四日未明、郁達夫は陥落直前のシンガポールを、他の人たちと民船で脱出した。いくつかの島を転々と回って、五月、スマトラ島のパヤコンブに辿りつく。パヤコンブは日本軍の憲兵司令部が置かれた場所で、郁達夫は日本語の精通者であることが、間もなく日本憲兵に発見された。そのあと、憲兵隊の通訳となる。翌年二月、郁達夫は肺病と偽って通訳をやめる。日本軍の目から逃れるため、彼は「趙豫記酒廠」の主人を装って友人と共に酒造工場を始めた。工場で醸造された白酒は、「太白」と「初恋」の二種類の銘柄だった。

一九四四年二月、郁達夫は密告によって憲兵の監視下に置かれる。日本敗戦のニュースを短波ラジオで知って喜んだ郁達夫は、四五年八月二十九日の夜、何者かによって自宅から呼び出され、その後行方不明になる。同年九月十七日、連合軍の戦犯裁判の結果、郁達夫が八月二十九日夜、ブキチンギ近くの荒野で日本憲兵に殺害されたことが判明した。<sup>※</sup>享年五〇歳。

シンガポールへ赴く郁達夫は、途中、香港を経由した後、イタリアの郵船でマニラへ向かう海上で書かれた随筆「歲朝新語」の中でこう述べる。「われわれの勝利はもう何の懸念もなくなった。それは敵側から再度出された「媾和条件」、または繰り返し発表された何とかの「声明」を見ると、すでに明白であることを反証できるのだ。…この強姦、殺人の罪を犯した犯人、世界の平和を攪乱した戦争犯人に対する正当な処罰を行わないかぎり、私としては落ち着いてある場所に安住できるとは考えられないことなのだった。」と。しかし、日本投降後も、憲兵が魔の手で彼を殺害しようとは郁達夫は少しも考えていなかった。

因みに、陸軍報道班員として徴用された井伏鱒二は、一九四一年十二月二日に大阪を出港、途中、タイのシンゴラ、マレー半島を南下したあと、一九四二年二月十六日、シンガポール陥落の翌日、現地に入った。日本軍の攻略により、シンガポールが「昭南島」に変身したのはその直後だった。シンガポールに進駐した井伏鱒二の任務は、現地の新聞社を接収して新聞を発行することだった。南洋での井伏鱒二の新聞社接収、新聞発行、及び南洋での日本憲兵による郁達夫殺害は、好対照的で、あまりにもシヨッキングな出来事だった。両作家の数奇なる運命が共に「昭南島」に刻印されている。

### 三 新居格と郁達夫の出会い

新居格は、「読売新聞」「大阪毎日新聞」「東京朝日新聞」の記者生活を経て文筆生活に入り、文芸評論、社会時評など活発な評論活動を行っていた。『左翼思潮』（大正一〇・九）、『アナキズム芸術論』（昭和五・五）などの評論を持つ彼は、自由人の立場からアナキズムの主張をつとめて論陣を張った。彼の文筆活動におけるもう一つ重要な位置づけは、上海との出会いだった。たとえば、彼の書いた「上海交會線」（『文学時代』一九三三年七月）は、最前線の上海のジャズクラブを紹介している。また彼の小説『上海』（『文芸』一九三五年三月）は、濁った黄浦江の流れている、西洋人街と中国人街とが混在した都会として描かれている。

上海、このヨーロッパ植民地主義者の手で繁栄させた魔都は、いわば東洋と西洋の交差点だった。一九二〇～三〇年代の魔都上海は、その魅力で世界の人々を惹きつけたのである。大勢の人々は、獲千金の夢で上海に集まった。中国近代文学の擡頭は、最も重要な一つの「近代的」空間の存在、即ち上海という都市空間に寄与するところが

大きかった。多くの中国現代作家が輩出されたのは、上海という都市空間とは切っても切れない関係にあるのだ。

日本に青春時代を送った郁達夫は、一九二一年六月、東京で中国人留学生郭沫若、徐祖正らと文学団体創造社を組織し、のちに活動舞台を上海に移す。上海で郁達夫は、小説「沈淪」のデビューで作家の地位を確立したのである。エキゾチックに捉えられた異国での漂泊感、衰退した中国の現実を憂慮する青年の憂鬱を描いた郁達夫は、当時の中国作家の中で最も注目された作家の一人であった。まだ東京帝国大学の学生だった郁達夫は、彼の執筆の「純文学季刊『創造』出版予定」（上海『時事新報』一九二一年九月二十九）のなかで、次のように述べる。

文化運動が始まって以来、我が国の新文芸は、一、二の偶像に独占されることによって、芸術の新しい気運が弱まって滅びようとしている。創造社同人は、奮然として社会的因襲を打破し、芸術の独立を主張し、天下の無名作家とともに、中国未来の国民文学を創ろうと願うのだ。

だが、出版資金難のため、『創造季刊』（上海泰東圖書局）が創刊されたのは、翌年（一九二二年）の三月だった。二十一年十月、郁達夫は生計を立てるため、郭沫若らの推薦で安徽公立法政専門学校英文科主任として赴任する。翌年一月、すぐ上海に戻る。そして、卒業試験のため、三月、日本に行く。五月、東京帝大経済学部を卒業した郁達夫は帰国する。上海でしばらく編集仕事に携わり、九月、再び安慶法政専門学校に行く。上海での郁の文学活動からみれば、新居格が郁達夫と会ったのは、郁が日本留学を終え帰国した直後だったと考えられる。中国新文学の創成期に、新居格が新鋭の作家郁達夫に関心を寄せたの

は、やはり注目すべきことである。

第一期『創造季刊』の巻頭に、郭沫若の詩「創造者」が掲載された。創造者とは、いわば新生児の誕生を意味するものである。『創造季刊』の刊行は、すなわち過去との決別、すべての始まりと言っても過言ではない。因襲的な風習の打破、偶像の破壊を声高に口にした創造社のウルトラリストたちは、斬新な世界を創造することを目指そうとした。創造社の抱いた理想像に対して、『アナキズム芸術論』など評論集を持つ新居格は、当然として興味を注がずにはいられなかったのだろう。当時、彼の中国に向けた日は、ジャーナリストとしての鋭い感覚を持ったものであり、ある意味ではコスモポリタンの精神を伴っていた。

昭和十年三月、竹内好らによる中国文学研究会が発足した。中国文学研究会は、従来の支那文学研究とは異なっており、日本の中国文学研究を「近代」という視野に入れるという、画期的な意義があった。『中国文学月報』第一号の「会史」に、昭和九年八月四日、帝都東京の山水楼で行われた北京大学教授周作人、徐祖正（耀辰）両氏の歓迎会には、「與謝野寛、佐藤春夫、有島有馬、新居格、竹田複五氏との共同発起なり、出席者二十五名。」と記されている。周作人は夫人羽太信子とともに帰省するため、七月十一日北京を発って日本を訪れた。日本でも一ヶ月あまり滞在して、八月二十八日北京にもどる。一九一九年に日本を訪れた周作人は、武者小路実篤らの行った新しき村の実践に非常に興味をもって、わざわざ日光まで行って何日間かの共同生活を体験したのに対し、二十年後に来日した周作人は、当時の関心度がすでに減退し、東京で武者小路実篤と会っただけだった。

当時、『中国文学月報』の刊行への感想文が寄せられたが、たとえば東京帝大教授鹽谷温は、『中國文學月報』の發刊を祝す「一文の中で次の反応を見せている。

最近新進學徒の間に、支那現代文學の研究が盛となり、昨夏周作人・徐祖正兩氏の來遊を迎へて、同人の小集があり、遂に中國文學研究會の創立となり、講演會やら、研究發表があり、機運が益々熟して「中國文學月報」の發刊を見るに到つたことは實に學界の慶事である。從來支那文學といへば、唐宋の詩文より、元明清の戲曲小説に及び、漸く面目を一新するに到つたが、革命以後には未だ手が付けられなかつた。中華民國も創立以來、既に二十餘年を経、孫文の三民主義より、蒋介石の新生活運動に至るまで幾多の變革があつた。畢竟文學は時代思潮の反映であるから、新文學を通して、思想の推移を研究するは極めて興味ある問題である。

新居格からも、「堅實な造方、結構だ、と存じます。その造方ですつくりつけて行かれると、いろいろのことが否でも應でもなされて行きます。／＼今のところ別に申し上げるところありません。ただこの上とも堅實な御發展を祈ります。」という言葉が送られている。

新居格は、早い時期から創造社の發起人郁達夫に接觸し、のちに魔都上海に足を運び、大上海に関する精力的な報道や小説を書き残した。その後、中国文學研究会發起人になり、戦時中、読売新聞社に依頼されて郁達夫に「和平工作」の書簡を送る。新聞社側からの依頼だったにもかかわらず、郁達夫宛書簡の中で、依然として新居格の早期のコスモポリタンの思想の痕跡が見られる。それらは、すべて過去の時代の中で新居格が歩んでいた足跡だったと、筆者は受けとめている。

## 結びに代えて

二十世紀は、戦争の世紀であった。植民地主義がその触手を伸す時代に幕を開けて以来、植民地の併合と抵抗が熾烈に展開してきた。明

治維新以降、着々と近代化の路線を歩んだ大日本帝国は、国策としての植民地主義を推進、近代天皇制を確立させた。それ以降、日清戦争や日露戦争を経て台湾、朝鮮半島、満州国への併合を実現した。だが、日中戦争から太平洋戦争を経て、大日本帝国の夢が消えた。

ここに、周作人の考えを披露しよう。彼曰く「人類には二つの愛の本能がある。一つは自己保存、もう一つは種族保存の本能があるのである。」この二つの本能からみれば、人類は他者への愛が可能なのである。ところが、二十世紀の中で国家主義が一つの理想、或いは一つの信仰のために他者を抹殺する手を緩めることはしなかつた。狂氣じみたあの大東亜戦争は、人類の理性的な理解の限界を遥かに超えてしまった。いわゆる大東亜共栄圏の実現のために、中国民衆、およびアジア近隣諸国に甚大な苦痛を与えてしまった。否、苦痛どころか、大東亜戦争は他民族の存続そのものを絶滅させるほどの侵略性があつたのである。あの殺戮、残酷極まりない末世は、今や無数の人々の記憶に刻まれている。王陽明の良知説は、まさしく郁達夫の書簡で言うように、殺伐、残酷の末世でも打ち破ることのできない真理なのである。

日本の侵略戦争が無数の人命を奪つたのはもちろんのこと、五四運動以降の、成熟しかけた中国近代文学の發展をも中断させてしまったのである。このことが、武田泰淳の手紙から充分に読み取れるだろう。その意味で、新居格・郁達夫往復書簡は、良き相互關係を開こうとして挫折せざるを得なかつたものとも言えよう。郁達夫の新居格宛の書簡は、特に日本軍の残虐行為を記録し、いわゆる大東亜共栄圏の欺瞞性を見破つた歴史の証しになっている。小文では、また三木清の汪兆銘に対する公開書簡の一部を引用したが、すでに述べたように、三木清は日本の侵略戦争という現実を度外視し、もっぱら「事變」の「世界史的意義」にこだわって、観念的な「歴史の理性的な目的」を追求

しようとしたのであった。武田泰淳の「支那文化に関する手紙」に比べて、三木清の「公開書簡」は、むしろ当時の時世を忠実に伝えてくれた。

後記二二〇〇年の夏、筆者は郁達夫の故郷・富陽を訪れ、郁達夫の孫娘郁嘉玲（五十二歳、現在、富陽市政協協商會議副主席）とのインタビューを行った。その話によると、一九三七年十二月、日本軍が杭州攻略に次いで富陽を侵攻した際に、郁達夫の母陸氏が富春江に面した郁家の別荘を離れようとしなかったため、日本軍の包囲の中で食糧が途絶え、十二月三十一日餓死したとのこと。因みに、郁達夫の長兄郁曼陀は、一九〇五年、浙江省第一回目の日本留学生派遣（百人）の中の一人として、早稲田大学師範科に留学、後に政法大学に法律を学ぶ。帰国後、弁護士として活躍で有名。一九三九年十月二十三日、汪兆銘側のスパイに暗殺。郁家の別荘は、郁曼陀が建てたものであり、現在、その建物は郁曼陀・郁達夫記念館になっている。郁達夫の生家は、その別荘から遠く離れている。

# 【注】

1) 一九二一年九月、当時東京大学在学中だった郁達夫は、郭沫若の要請で上海に戻って『創造季刊』の編集仕事を携えた。資金難に直面した郁は、生計のため、十月、郭沫若の斡旋で安徽公立法政専門学校英文科主任として赴任する。

2) 『創造社資料・下』所収（福建人民出版社、一九八五・一）

3) 『創造社資料・下』所収（福建人民出版社、一九八五・一）

4) 『郁達夫研究資料・上』所収（花城出版社、一九八五・八）

5) 『三木清全集』第十五卷（岩波書店）に所収。

6) 三木清の「東亜協同體」論については、小文では詳述する紙幅がないので、詳しくは、米谷匡史（三木清の「世界史の哲学」・日中戦争と「世界」）『批評空間』第Ⅱ期第19号、太田出版）を参照。

7) 武田泰淳「支那文化に関する手紙」『中国文学月報』第五十八号、一九四〇年一月、「滅亡について他」三篇所収、岩波文庫）

8) 郁達夫「文化疎通に関する書信」『星洲日報・晨星』、一九三八・一一・一八、『郁達夫海外文集』所収）

9) 日本憲兵による郁達夫殺害についてだが、昨年（二〇〇〇年）の夏、筆者が郁達夫の故郷を訪れ、郁の孫娘郁嘉玲とのインタビューを行った。その話によると、郁達夫は一九四五年八月二十九日の夜、何者かに呼び出された後、プキチングの荒野の中で憲兵の魔の手により窒息死させたという。なお、本稿の部分的論述は、拙稿「日本帝国主義の戦争への抵抗―作家・郁達夫晩年の足跡―（近代の夢と知性―文学・思想の昭和―）（一九四五・一九四五）」、文学・思想懇話会編、翰林書房、平成十二・一〇）と重なっている部分があると断っておく。